論考

境界あるいは媒介としてのドローイング

土田祥ノ介
（本展企画者、早稲田大学文学学術院）

芸術における「drawing」という単語の解釈は難解である。単純に線描、つまり引っぱられたものの痕跡と捉えるのか。あるいは、自らの経験した事象をイメージとして再生成する過程における、意味・色彩・フォルムなどの引用という行為自体を指すと解釈することも可能であろう。また、過去を振り返れば、現代美術において芸術表現の様式として広く受け入れられるまで、長きにわたり「素描」という訳語が当てられてきた。つまり、創作の前段階として形態の輪郭を定着させた、理性的かつ均整的な痕跡としての線だったのである。しかし、現代においてドローイングは、必ずしも鉛筆や紙という限定的な環境に閉じ込められるのではなく、むしろ線的性質を含むあらゆる表現の基盤として、領域横断的に再定義されつつある。もはや素描や線描はおろか、言葉や記号を用いたコンセプチュアル・アートからパフォーマンス作品まで、その対象はとどまることを知らない。本展「Draw-ing：境界を漂う―開かれた布置」は、こうした動向を受け継ぎつつも、小林夏美による版画と、松田啓佑によるペインティング／ドローイングを取り上げ、改めて平面表現における今日のドローイング像を再考するものである。

小林夏美は、リトグラフによる版画をモノプリントとして制作している。美術家としてのキャリアは造園の仕事から派生し、初期は写実的な植物画の制作に取り組んでいたという。版画制作においても、初期作品から現在までを通覧すると、次第に要素が削ぎ落とされ抽象的な画面へと変遷していく過程が読み取れるものの、モティーフには一貫して自らが実際に目にしてきた事物を採用している。

ところで、版画は大きく 2 つの種類に分けることができるだろう。ひとつは、版に彫られた微細な凹凸を利用した線描そのものの表現。もうひとつは、複層的に色彩を重ねることで、色面分割による画面構成を生み出すものである。多くの作家と同様に、小林の作品においても、線や色彩の境界は、モティーフとなった事物の輪郭をなぞるように刷られたものである。こうした中、本展では 2022 年制作の作品が計 5 点展示されているが、近年の〈Grass and Water〉シリーズと比較すると、面的な要素が強調されているように思われる。境界としての線から、直接的な形態描写としての線へと、その役割は次第に変化していったのであろう。

日常の中に線的なモティーフを見出した上で、記憶を頼りにミニマルな形態に再構成し、任意の色を乗せていくという小林の制作方法。そこに、版表現に特有の、素材同士の偶発的な反発作用を伴う転写という行為が組み合わさることで、作品内における小林の個人的な要素との中和が意図せず生まれているのかもしれない。

松田啓佑は、アトリエに置かれた自らの身体を取り巻く世界を知覚したと同時に、即興的に色彩やストロークに置き換え再現することを試みている。極度に抽象化されたかのように見える画面だが、そのモティーフは、不可視な要素を含みつつも確かに経験した現実世界なのである。

また、描画の際に大胆なストロークを用いる作家は数多くいるが、松田の用いるストロークは始筆と終筆の向きが明らかなことが大きな特徴として挙げられる。数々のストロークが呼応するように同方向に

引かれたものもあれば、打ち消しあうように逆方向に引かれているものもある。ペインティングと並行して陶芸による制作も手がける松田らしく、これまでの抽象絵画に多く見受けられた、対象を平面空間的に解釈することへの関心ではなく、2 次的なイメージとして置き換えるまでの時間の流れへの関心がうかがえるであろう。こうした、画面外への連続性すらも感じさせる松田の実践は、小林の作品における面性・境界性を備えたドローイング像とは一風異なる。まさに、展覧会の副題に含めた「開かれた布置」という言葉が示すように、完成された像を示すための痕跡なのではなく、揺らぎを持った記憶を脳内で反復することで生まれる断片的なイメージの相互作用を発生させる装置として、ストロークによるドローイングという手法を用いているのだろう。